

天候不良に強い秋まき小麦の作り方

概要 Abstract

- ① 「きたほなみ」は多肥や起生期重点施肥で栽培すると、日照が少ない登熟条件での減収が大きくなります。
- ② 起生期ではなく幼穂形成期に追肥すると、群落の受光態勢が向上し、日照が少ない場合でも減収を小さくできます。
- ③ 登熟不良条件では穂数を増やしても製品収量が増加しません。収量・品質の年次変動を小さくするには穂数550~650本/m²を目標に受光態勢を良好に保つことが有効です。



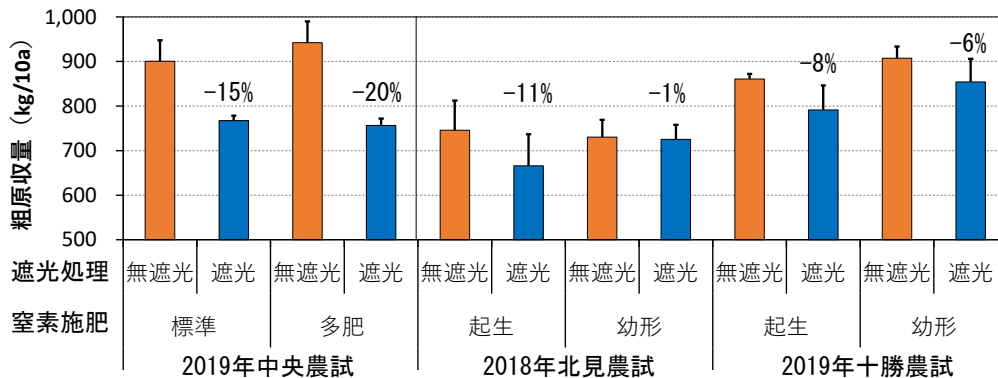
これまでの目標（穂数700本/m²）



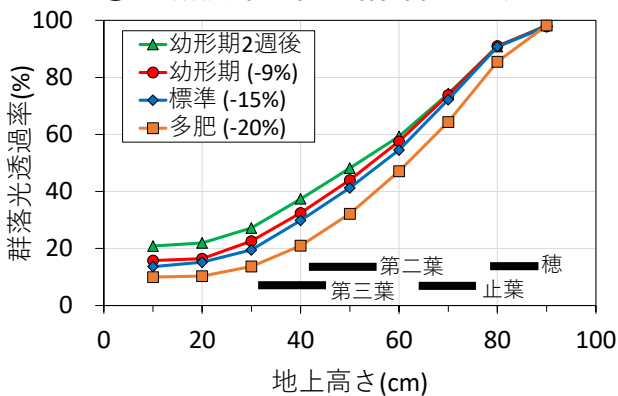
安定生産に向けた目標
（写真は穂数550本/m²）

成果 Results

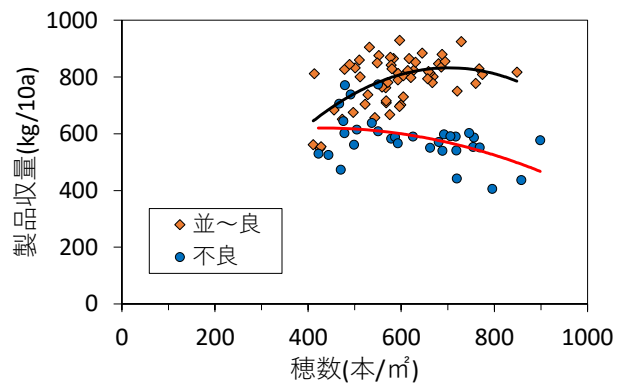
①日照が少ない登熟条件での施肥管理と収量



②登熟期間中の群落内の光量



③登熟条件の良否による穂数と製品収量の関係



普及 Dissemination

・気象による収量・品質の年次変動緩和に向けた対応技術として活用する。

連絡先 Contact

中央農業試験場
農業環境部 栽培環境グループ
0123-89-2001
central-agri@hro.or.jp